

17世紀初期“女性論争”における「作者」の位置について

米谷 郁子

Joseph Swetnam の *The Arraignment of Lewde, Idle, Froward and Unconstant Women* (1615) とこれへの反論として書かれた Rachel Speght の *A Mouzell for Melastomus* (1617) とは、17世紀初めのいわゆる「女性論争」における中心的な役割を果たした2つのテキストである。この2作品は、共に時代を超えて読み手の間でジェンダーの問題への関心が深まるきっかけの一部を担ったものの、書き手の「作者としての主体形成」という側面では全く異なる立場を示している。以下の試論では、この「作者性」を見ていくことで、17世紀の作者たちが一度に多数の異なる制度や言説と不確かな交渉を重ねていたこと、この重ね書きとも呼べるような関係を考察する。それによって、ジェンダーとの関係において捉えられてきた言説が、初期近代英国における「テキスト」の観念と「作者」の認識にまつわる諸相を如何に表しているかについて跡づけたい。

1. “Who is speaking?”

時を越えて読者を見つめ続ける疲れ気味の目。結んだ唇。耳にピアス。スキンヘッド。生前に名声を確立して50代で死んだことが知られ、その著作群は紛れもないキャンノンとして受容されている。この一見無表情な肖像のどこに、あの著作へのエネルギーが隠されているのだろうか。

この Michel Foucault と William Shakespeare¹ のダブリングで見えてくるのは、彼(ら)のもつ圧倒的な作者としての力が皮肉なことに、作者性への問題視、「作者の死」と結び付けられて考えられてきたことである。ここ数十年にわたる研究の成果は、テキストの意味を生み出す始原として捉えられてきた「作者性」と「正典」の持つヘゲモニーの両方を可視化させ、さらに批判する試み、として要約されるだろう。²そして作者や正典だけでなく「文学」というカテゴリー自体さえも、時代ごとのイデオロギーに応じつつ歴史的に構成されたものであること。さらに、そんな「文学」によって立ち上げられた「マスター・キャンノン」は、「包摂・特権化」による一方の「名作」崇拝と、他方そこに囲いこめないものを「排除」し続ける作業によってはじめて成り立ってきた産物であることを明らかにした。³このような地平で、20世紀のフーコーは他の作者達の縮図として立ち現れる。

晩年のシェイクスピアと同時代人であったルネサンス女性作者達の著作を「再発見」し、テキストとして復元する最近の多数の試みは、こうした「正典」の伝統形成にまつわるイデオロギーへの異議申し立てとして意味をもつだけではない。テキスト自体の忘却によって今までは扱われなかった、当時の潜在的な作者達や読者層を発掘し認識する試みも含んでいる。しかしながら Stephanie Wright はこうしたプロジェクトに内在する問題を以下のように論じる：“the sole issue of recognition appears to have dominated at the expense of a thoroughly worked out strategy for (re)instatement” (55)。ここで Wright の論を手放して支持できるかどうかは別としても、この論は先に述べた「発掘・認識」の試みで核となる問題意識を孕んでいる。そしてその問題意識は、私たちに「作者性」の問題へ再び立ち返ることを必然的に要求してくる。

そもそも「作者」を「認識する」とは何か、そしていかなる過程をへて実現されるのか。テキストの向こうに確かに存在はしたけれども長く抹消されていた作者の存在を再認識・再強調することは、Kate Chedgzoy が論じるとおり、ルネサンス女性作者発掘の過程では重要なことであった(1)。しかし、こうした形での「作者」の

再強調、言い換えれば「発話しているのは誰か?」という問題に寄り添う形で解釈や批評を追求することは、以前 Toril Moi が“autobiography, a mere window on to the self and the world, with no reality of its own”への還元でしかない既に批判していたような手続きを改めて女性作者論に持ち込む危険がある(8)。更にこのような手続きは、テキスト上に現れる「私」を作者の自意識と安易に同一視する危険を伴い、「登場人物としての『私』」、「語り手としての『私』」、「作者としての『私』」の間の横滑り的な関係を発生・成立させることにもつながってしまう。

女性作家の「署名つき」テキストを研究する上で、Dianne Purkiss が論じるところによると、署名に基づいて作者の存在を「発見する」ことは、特に17世紀女性論争を論じる際に特有の困難を伴うと指摘する。多くの批評家にとって、当時の「女性達の署名つきの」テキストは、以下のような特有の欲望を刺激し、可視化させる:

a desire for material girls, women as real as ourselves. Having located the emotion-laden speaking voice of an author in the text, this voice must in turn be sited in a female agent; indeed the voice is prized less for itself than as a sign pointing towards such an authorial presence. A logocentric cycle is set up whereby a female signature prompts a reading strategy designed to uncover female consciousness in texts, and this consciousness in turn is held to manifest the presence of a female author. (71)

しかし、例えば Constantia Munda や Ester Sowernam のような筆名・偽名によるテキストの場合、さらに匿名の場合、作者のアイデンティティは不明なままであるから、いざ批評家が「女性特有の」経験や意識を与件として取り上げてそこに価値を置こうとすれば当然、作者のジェンダーに関するプリミティブな誤認から議論が始まってしまう。「語っているのは誰か?」に足場を置く解釈は必然的に、女性の名を横領しつつ女性について語る男性作家の扱いにも問題をもたらす。書き手の性別(Sexuality)ではなく、書き手が選んだポジション(Gender)が重要になる時、そして筆名のテキストからジェンダーに絡む読みを引き出す時、この問題と如何に向き合えばよいのだろうか。Elizabeth Harvey は問う: “[w]hat difference does it make who is speaking and who fashions a literary ‘voice’?” “Is there necessarily a difference between a feminine voice constructed by a female as opposed to a male author?” (16)⁴

そして、たとえ(女性)作家のアイデンティティがある程度まで確認されたとしても、Purkissによって示された先の読みの行為は問題含みであり、“reinscribe singular notions of woman’s essential character or voice, writing the female as something immediately visible or identifiable”という傾向を持っている点で、“politically dangerous”である(Purkiss 71)。ジェンダー構築の背景や、個別のテキストに関わるコンテキストを無視、あるいは超越したままで本質的に「女性性」を作者の主体に帰属させる視点は、そこから必然的に零れ落ちる他の女性(性)や(複数の)声は無視する危険を伴う。Chedgzoy が論じるとおり、作者の「女性性」を「認識すること」「確立すること」への欲望は、他の差異を歴史的な意味でも抹消・忘却する危険を必然的に伴い、女性作者を「発見」する作業が本来目指していた「(女性の)声」の解放を結果的には抑圧することに繋がりがかねない(Chedgzoy 8)。

(女性)作家の著作の再発見、復元の作業に伴う作者の役割については、とりわけ2つの課題が挙げられる:一つは、テキストの解釈のなかで、「作者」がどのような役割を果たすべきか、また果たす事が可能か。2つめに、ジェンダー、人種などに基づく作者の「アイデンティティ探し」には、どのような思惑が働き目的化されるのか、そしてわたしたちの読みに、そのような思惑がどの程度まで反映されているのか。この2つの課題にすぐに答えることが出来るとは思わないが、こうした疑問との持続的な対話が以下の試論の核となっていることをまず強調したい。試論では、17世紀のパンフレットに表れる作者の名が、「作者」の意図や意識をテキストの向こう側にある「始原」として同定する記号なのではなくて、そのテキストが依拠する他の多数の文化上・文学上の

ディスクールと不安定な関係性を取り結びつつ成り立つ、その「関係性」を指し示している点を論じる。いかに作者のペルソナがテキストに書き込まれているように見えても、そしていかにそれが一見したところテキストと切り離せない一部をなすにしても、そのペルソナは後の読者による後追いの再発見や解釈の産物として、不安定に留まりつづける。この意味で、「作者」を書かれたテキストとその解釈の産物として、テキストに刻印された臨界として捉えねばならない。まず、Joseph Swetnam の *The Arraignment* を読むことから始めたい。

2. “Bear-baying of women”

The Arraignment は、これに反論する形で女性の声を借りて書かれた後年のパンフレットのきっかけとしてのみ、現代の批評家に受容されている。Linda Woodbridge は、このテキストが論理性と口調の両面において問題含みであり、Swetnam 自身の “wearisome harangue” が生んだ “verbal diarrhea” であると断罪する (84-87)。Simon Shepherd にとって、*The Arraignment* は “grossly derivative in its language and ideas and loose and repetitive in its expression of them” でしかない (53)。Kate Aughterson 編集のアンソロジーに至っては、Speght らによる Swetnam への反論のみを “Proto-feminism” の章で取り上げ、Swetnam の著作自体の吟味を怠っている。おそらく Swetnam に対する最も積極的な評価は、Barbara Kiefer Lewalski の以下の言葉であろう：“rambling, boisterous, tonally confused but lively” (Speght, xiv)。

ただここで指摘しておくべきことは、Swetnam のテキストが出版後 20 年の間に 10 版と版を重ねたのに対し、Swetnam への反論の方は軒並み初版印刷に留まったという歴史的事実である。同時代の読者は、現代における批評の取り上げ方とは明らかに異なる反応を示していたのである。

ここで *The Arraignment* の作品自体の位置を、Swetnam という名の作者——そもそも Swetnam の名前は Speght の *Mouzell for Melastomus* の中で初めて明らかにされたのだが——からは独立させて考えてみたい。目指すところは、「作者性」がテキストの向こう側に存在するとされていた、唯一の始原としての「作者の意図」に意味を見出す作業に疑問に付し、テキスト解釈の産物としての作者のペルソナに光を当てることである。

「Swetnam」の名前が *The Arraignment* 初版のどこにも見当たらないという単純な事実は、意外と見過ごされている。タイトルページには名前もイニシャルも印刷されておらず、テキストの始まりにある “common sort of women” への Epistle に加えられているのは、以下の記述だけである：“*Yours in the way of Honesty, Thomas Tel-troth*” (A3)。³ “the ordinary sort of giddy headed young-men” に与えられた 2 つ目の Epistle には、以下のサインがついている：“*Thy friend nameless, To keepe my selfe blameles*” (A3^v)。こうした筆名の使用は同時代のパンフレットにはよく見られる現象であって、*Mouzell* は作者の本名が初版から印刷されて出版された例外的なテキストである。ただし、*The Arraignment* 初版で作者によって選び取られた筆名は、ある特定の文脈における「ことわざ」的な特徴を持っている。すなわち “Thomas Tel-troth” という筆名は、16,7 世紀にかけて、特に 17 世紀後半の政治的なパンフレットにおいてはよく用いられた、「正直で誠実で信頼できる男」のラベルであった。

例えば 1593 年に出版された *Tell-Trothes New Yeares Gift Beeing Robin Good-fellowes neues out of those Counties, where inhabites neither Charity nor honesty* の冒頭における語り手の声に注目してみよう。Robin-Goodfellow との出会いについて語りながら、Tell-Troth は言う：“A merry mate hee was, and matched with one of his owne minde, a simple fellow, that marchinge vnder the habbite of true meaninge, tels all that he sees, and euery thing he thinkes to be true: *Tell-troth* is my name, and you may trust me if you will, for I assure you, that he that crediteth me most, shall not speede worst” (A2)。New Yeares Gift は、多くのエリザベス朝の conduct books に典型

的に見られるように、夫婦に理想的な関係のあり方を説いている。ただ、*New Yeares Gift*は男女間の性差における不平等というお決まりのイデオロギーを体現してはいるものの、ここで批判の矛先に立っているのは紛れもなく男性達の方である：嫉妬深く不実であり、妻に暴力を働き、淫らな放言を楽しみ、妻に要求を重ねる男達はすべて、侮蔑を受けるにふさわしい存在として非難される。テグストでは確かに男性側からの女性の一方的な定義付けがなされてはいるが、同時代の読者から misogyny とみなされるような論調は見当たらない。*New Yeares Gift*は、夫婦間の口論の寓話を取り上げながら、夫婦の関係性について積極的に考察を試みているテキストとして位置付ける事が出来る。語り手 Tell-troth も、その名から期待される役割をテキストの中で果たしているといえるだろう。

1600年には、John Lane が *Tom Tel-Troths Message, and his pens complaint* というパンフレットを著している。この中で Tel-Troth は、英国に見られる罪と悪徳をカタログ化し糾弾しているのだが、Tel-Troth という語り手のペルソナはやはり屈託のない語り口と誠実さのシンボルとして、*New Yeares Gift*におけるのと同じような位置付けを獲得している。第一スタンザで著者 Lane は神の加護を求めながら、以下のように言う：“like a tell-troth it may boldly blaze, / And pensill-like paint forth a iust dispraise” (A4)。ここで注目したいのは、Tom Tel-Troth は作者のアイデンティティを覆う筆名ではなくて、テキスト上、もっと言えば文化的な背景上特徴的なペルソナとして機能していることである。タイトルページと献詩の両方には Lane の名前が記され、その Lane が本文の中では Tom Tel-Troth の名を、社会批判に理想的なポジションとして選び取るのである。ここで当然の帰結として推定できることは、*The Arraignment* の初版の読者は “Tel-troth” の名が示す従来の語り手の役割への期待や、文脈への了解事項をもって読み進んだのではないか、ということだ。

勿論、*The Arraignment* の読者はすぐに “Thomas Tel-troth” の名前で約束された語り手の誠実さ、単純さから本文が逸脱していくことに気づく。むしろ、Euphuus の以下の言葉—— “[m]using with my selfe being idle” (A2) —— で始まる Epistle で、作者はこのテキストが誠実かつ真面目なものとは程遠いものであることを示している。続いて作者は、“I wrote this booke with my hand, but not with my heart” と言い、更に続く “the ordinary sort of giddy headed young-men” の中で “Bear-bayting of women” (A3) として、自らを特徴付ける。そして作者は Lyly の著作から多くを借用するのみならず、Anthony Munday の Euphuistic な小説 *Zelauto: the Fountaine of Fame* (1580) から借用を行い、Lyly のスタイルに倣って多くのことわざに読者の注意を喚起する。こうした特徴—— トーンの多彩な変化、一貫性のなさ、他のテキストからの逐語的な借用 —— は、このパンフレット全体の特徴を予表しているし、他のテキストとの緊密な関係性こそが *The Arraignment* の作者のペルソナを大部分決定しているのだ。以下にその一例を挙げたい。

“a remedy against loue, also many reasons not to be to hasty in choice of a wife. But if no remedy but thou wilt marry, then howe to choose a wife, with a Commendations of the good, virtuous, and honest women” (F1) という題名がついた章がある。前述した様々な借用やことわざに満ちた部分が続き、書き手の一貫性のなさや主張の揺れは例えば、若い男性に向けて妻選びにとりわけ慎重を期することを説いた直後、その慎重を期した選択が常に失敗に終わることを示す小断が差し挟まれるでも明らかである (G1^v-G3)。

この寓話の直後の4ページは、Pedro Mexia による *The Foreste: or Collection of Historyes* (1576) からの借用にあてられている。それまでの文章とトーンが異なるものの、ここでは男の妻選びに関する語り口はかなり気楽なものとなっている。男性の結婚適齢期は25歳で、17歳前後の年齢の女性を妻に娶ることが理想であるとした後、Mexiaの説を借用して、“flexible and bending to what soeuer man would have them, obedient and subject to his will and pleasure” である若い女が、“alredy trained, to the paruerse appatite som time, and fond fantasie of others, and therefore hard to be draiven back, from the wunted and strange devises of their first freend or husband” である未亡人よりもはるかに望ましいと説く。⁴

しかし、*The Foreste* からの借用が *The Arraignment* に組み込まれる際に、めだつたゆれや緊張が生まれてくる。*The Foreste* の中にある “of the cordiall and hartie loue that should be in marriage, with diuerse examples serving to that purpose” (M4) という名の章が組み込まれる様子を見てみよう。*The Foreste* では、結婚は以下のように理想化される：“a thing so excellent” “betwixt the honest couple, the body and wil is one, that which neuer happeneth in any other kinde of amitie” (M4^v)。Mexia のテキストは以下に Lucretia, Adam と Eve, Alexander, the king of Ayra などの模範例が続く。*The Arraignment* でも同様に列挙されるが、主張の枠組みが異なってくる：“Some thriue by dicing but not one in a hundreth therefore dicing is ill husbandry, some thriue by marriage, and yet many are undone by marriage [...] and yet I will not say but amongst dust there is Pearle found, and in hard rockes Dyamonds of great value. . .” (G4)。 *The Arraignment* に現れる例は、両性間の愛情ではなくミソジニーのルールの例外として扱われている。

次に見る借用は更に大幅な見解の転回を示す。Stefano Guazzo の *Civile Conuersatione* (1586) から逐語的借用をした後、*The Arraignment* は *New Yeares Gift* と同様の conduct book のような様相を見せ始める。これから妻になる女のあるべき容姿、育ち、富とともに、夫の取るべき態度を以下のように示す：“alwaies [...] shew himselfe in speech and countenance both gentle and amiable . . . [and] prouide to satisfie the honest desires of his wife” (H3)。 *The Arraignment* 始めの方の章で喜劇的な効果にパロディックに転倒されていたプロテスタント倫理の教えが、ここでは「夫婦一体」という美德として全面的に肯定されている。ここに至って最も目を引くのは、*The Arraignment* が “a man should [...] accout of his wife, as the only treasure he enioyeth vpon earth” (H3) と、幾ばくのアイロニーさえ見せずに主張している点である。この章の始めやそれ以前の2章に見られた主張(寓話とミソジニー的説論、Euphuism)と比べれば、ここでの主張が論理・口調両面で転換していることが明らかである。最初の頃の女性描写——非理性的でやかましい男の敵——は、子育てを通じて女性が経験する苦痛や困難に対するの思いやりのある言及に変わっている：“Amongst all the creatures that God hath created, there is none more subject to misery then a woman [...] there is no disease that a man indureth, that is one half so grieuous or painefull as child-bearing is to a woman” (I1)。

翻って最終章は最初の方の章に見られた女嫌いな調子に立ち返り、未亡人との結婚による災いについて語られる。“*The Bearbaiting or the vanity of Widdowes: choose you whether*” というタイトルで、jest books や George Whetstone の *Heptameron of Ciuill Discourses* (1582) からの借用による女嫌い言説が横溢している。Whetstone のパンフレットは確かにジェンダーについての家父長的な見解がまとめられており、女嫌い者の描くステレオタイプを喚起するおかしみや歎びが混ざった口調である。しかし、Guazzo のパンフレットと同様、同時代の読者はこれをミソジニー作品としては読まなかったはずである。ただ、この中に登場する Dr. Mossenigo という人物は明らかに女嫌いであり皮肉屋であって、*The Arraignment* の Whetstone からの借用は専らこの人物の発話からとられており、Weststone が挿入した Mossenigo の対話相手である虚構の女性人物からの反論は全く無視されている。Lyly からの借用も最後になって復活し、作者が本を終えるころには、このテキストが “the toys of an idle head” (I4) としてのみ受容されるよう、但し書きをつけるのである。

現代の読者にとって、様々な揺れや矛盾、多彩なトーン、一貫性のないテキストの借用の仕方を含む *The Arraignment* から作者の性質や論理を同定することは極めて困難である。*The Arraignment* の作者はこのテキストに現れる様々な文面——警句、借用、冗談——の始原として見なすことは出来ないし、統合的な一貫性のある作者像をテキストから抽出することは、よって不可能である。

Woodbridge や Aughterson らのように、女性論争パンフレット文学の系譜上に “Swetnam” を位置付ける試みは確かに多くの実りをもたらしているものの、ことこのテキスト自体に関しては充実した説明がなされていない。Woodbridge が Swetnam に下した結論は、以下に留まっている：

[Swetnam] has plundered the formal controversy, carrying off an unsorted booty of the controversy's conventions, arguments, authorities, jests, and *exempla*, along with miscellaneous shards of misogyny snapped up from nonformal literature; but he neither respects nor understands the genre. (87)

Woodbridgeの解釈ではこのテキストがパンフレットというジャンルのもつ水準を満たしていないということになる。しかしそもそもジャンルという切り口から論じるだけでは、このテキストが何故ここまで人気を博したのか、という素朴な疑問を考える上では不十分である。Purkissは*The Arraignment*にバラッド的な要素などに見られるカーニバル的な女嫌い文学の要素を認め、そこから逆に家父長制イデオロギーを覆す機運を見出し、魅力ある解説を行っている。しかし両者の批評とも、このテキストがもたらす期待と失望、予測とその裏切りからくる驚きといった、一貫した論理に基づいた解釈が許されない読みの地平を説明しきれていない。この互いに矛盾しあう読みのダイナミズムこそが、家父長制に支えられた社会と、そこに存立基盤をもちながらも家父長制自体を転覆させかねない女嫌いの欲望とが交差する文化の不安を体現しているのではないか。*The Arraignment*はこうした矛盾や不安を横溢させたテキストであったとすることができよう。

3. A Trappe for a Flea

次に、*The Arraignment*への反論として書かれた Rachel Speghtの*A Mouzell for Melastomus*を見る。特にSpeghtが“Joseph Swetnam”という人物を「作者として」どのように構築し位置付け、それにパブリックな立場で対応する「作者性」をSpeghtが如何に獲得していくかを追っていく。まずMouzellの構造と議論の領域について短く触れておく。Mouzellは、3つのセクションに分かれている：2つのEpistlesと4つの詩、正誤表リストを含む前置き部分；女性の本質と男性との関係性について述べた本論部分；それに*Certaine Quaeres to the Bayter of Women*という題のついた（別個のタイトルページがついているが、ページ数では前の部分と連続している）結論部。⁷ここでは*The Arraignment*の議論と、Speght自身の書き手としてのペルソナ構築の両方が中心となっている前置き部分と結論部に注目したい。

初期近代の女性作者の観念には、特に女性教育問題の側面から、多くの錯綜した問題が絡んでくる。「書くということの領域」が男性ジェンダーに託して考えられた時代に、「作者」の観念とジェンダー言説の関わりをどう捉えることができるのか。⁸例えばThomas Salterは、学問の効用を、それが若い女性にもたらしかねない「多大な痛みと損失」と引き比べながら、女性は“the skill of well using a penne or wrighting a lofty vearce”を磨くよりも、“Distaffe, and Spindle, Nedle and Thimble”に携わっていた方が“far more conuenient”だと論じた(C2)。Salterにとって女性の教育に読書が取り入れられるのはあくまでも、選ばれたテキストが“no other bookes but such that as bee written by godlie Fathers, to our instruction and soule's health”(C3)の範囲を越えない限りにおいてであった。⁹Margaret Fergusonが論じるように、女性の教育は“the dutiful consumption of men's words”の限りにおいて求められ、よって“the production of copious discourse”と特徴付けられた男性の読み書き教育とは異なっていたであろう(Ferguson 154-55)。

こうした教育モデルに基づく、男性の書き手による女性の振る舞いについての記述は、conduct-booksやさらに広範囲の文化的言説で語られてきた女性論に反映されている。女性性に対する支配・制御の必要性を説く中で、これらのテキストは妻の貞淑を説くだけでなく、女性の社会への参画の仕方に特別な注意を払っている。Ann Rosalind Jonesが注目するように、女性の貞淑さは無口の美德として表された(52)。女性の無口と美德をリ

ンクさせるやり方は Richard Brathwait の *The English Gentlewoman* に明らかであり、そこでは女性は以下のように語られる：“in no particular detract they more from their honour, than by giuing too free scope to that glibbery member” (80)。特に若い女性については以下のような記述がある：

bashful silence is an ornament to their Sexe. Volubility of tongue in these, argues either rudenesse of breeding, or boldnesse of expression. [...] It will beseeme you, *Gentlewomen*, whose generous education hath estranged you from the *first*, and whose modest disposition hath wean'd you from the *last*; in publike consorts to *obserue* rather than *discourse*. It suites not with *her* honour, for a *young woman* to be prolocutor. (89)⁹

ちなみに Speght は *Mouzell* を書いた時にはまだ 10 代であった。ここで Ferguson を再び引用すると：“If women are prescriptively defined as ‘chaste, silent and obedient’, according to a well-known ideal in Renaissance conduct books, and if both writing and printing are defined, for any number of reasons, as ‘masculine’ activities and-also in opposition to ‘silence’, then the phrase ‘woman writer’ will be seen as a contradiction in terms” (145)。公共の言説空間に参画する女性は、男性権力による私的空間への囲い込みからはみだす点で娼婦と同じであり、Barnabe Rich の言葉を借りればそんな女性（作家）にとっては：“*the pathes [...] are moouable [...] shee is still gadding from place to place, from person to person, from companie to company*” (F1) ということになる。初期近代ジェンダー言説において、女性作者が公的な声を獲得する時には、以上のようなイデオロギーによる抑圧を受けることは明らかである。

The Arraignment の作者も女性の沈黙と発話について語っている。“*the common sort of women*” へ向けた Epistle で、彼は美德と無口を奨励するイデオロギーが、女性からの応答を抑圧するように働くことを語る：

I know I shall be bitten by many because I touch many, but before I goe any further let me whisper one worde in your eares, and that is this, whatsoeuer you thinke priuately, I wish you to conceale it with silence, least in starting vp to finde fault you proue your selues guilty of these monstrous accusations which are heere following against some women[.] (A2¹⁰)

女性からの唯一の応答は「沈黙」である。ここで反論することはそのまま、この本によって攻撃された女性の放縦さ、非合理的思考を實踐することに繋がり、よって作者の標的を体现することになる。

しかし Speght は作者として、これらの抑圧的な言説と交渉する声を獲得し、女性の性質と立場を語り直す立場を獲得する。ここで Speght の応答を見ていくために、Barthes の発言を参照してみる。彼は言う：

To give a text an Author is to impose a limit on that text, to furnish it with a final signified, to close the writing. Such a conception suits criticism very well, the latter allotting itself the important task of *discovering* the Author [...] beneath the work: *when the Author has been found, the text is “explained”* – victory to the critic. (149–150、斜線強調は筆者)

ここでバルトが批評家の仕事として使った “*découvrir*” において、「発見される」のはテキストに表れる「作者の意図」である。しかし、「発見すること」は、隠されていた客体（の脆弱さ）を明らかにする事、「覆いを外すこと」という意味合いも含む。勿論ここで強調しておかねばならないのは、作者によって読者に解釈を委ねられたテキストの意味は、いつも偶発的であり不安定であり錯覚含みのものであって、「作者の死」（「語るのは構

造である)としてバルトが語ったことは、ある意味このような「真の発見」という可能性の疑問視・否定であった。

それでは、Mouzellの作者を「発見する」とはいかなることか。これまで Speght のテキストは、*The Arraignment* の作者「発見」の行為において語られてきた(Lewalski xiv)。Mouzellが出版される頃には、*The Arraignment* には既に Swetnam の名前が表れていたが、ともかく上で Barthes がのべたような意味で Speght が Swetnam を「発見した」という位置付けははまだ実際になされている。

上述したとおり、*The Arraignment* において、始原としての作者という観念は成り立たない。2版目で Epistle の終わりに Swetnam の署名が付いたにしてもまだ問題は残る：タイトルページには署名がないままであるし、多くの借用によって成り立つ中身も変わらないままである。Swetnam を名指すことで始められる Speght の応答は、一人の作者を「個別化」することでも呼べるような、注目すべき手続きを経ている。¹⁴ Mouzell のタイトルページには、“an Apologeticall Answer to that Irreligious and Illiterate Pamphlet made by Io. Sw. [...] By Rachel Speght” とある。*The Arraignment* で作者が匿名のまま女性一般に対して悪態をついたのとは対照的に、Speght の応答は個人としての作者が、同じく個人として可視化させた作者へ応答する形を取っている。この戦略はテキスト全体を通じて遂行されるが、とりわけ序論部と *Certaine Quaeres* において顕著である。2つの Epistle には両方ともに Speght の署名が付けられており、特に2番目の方では直接的に Swetnam 自身に向けて書かれている。2つの Epistle の間には Swetnam の名前をもじった Acrostic がおかれ、序論はこの2人の論争者を描く3つの筆名による献詩で終わり、この中で Speght は危険な敵と戦う勇気ある戦士として描かれている。*Certaine Quaeres* の方も “Bayter of Women” としての Swetnam に直接訴えかける形で、Swetnam への反対意見と根拠が述べられる。

序論部はただ単に2人の「作者」を名付けて個別化し、上述のような抑圧的なイデオロギーを背景として表れた特定の言説を、ある個人としての発話者に仮託させるよう働くだけではない。“all virtuous Ladies” にあてられた最初の Epistle は *The Arraignment* の作者個人に注意を引きつけ、女性達に “enflamed with choler against this our enraged adversarie” しないよう呼びかけるだけでなく、むしろ “consider of him according to the portraiture which he hath drawne of himselfe, his Writings being the very embleme of a monster” (4) として、テキストから導き出される作者像に注目せよと言う。しかし Speght のテキストは既に読者が Swetnam という固有名をもつ作者個人の存在をよりはっきりと感知するように注意を払う。よってテキストを支配しているのは *The Arraignment* の作者像の明示という作業なのである。これらのイメージ化戦略は、以下に述べるようなレトリックと、正面からの中傷によっている。例えば Speght は Swetnam に言及する時に何度も動物のイメージを持ち出す。最初の Epistle では、Swetnam を以下のように描写する：“the viper [...] who in the Winter time doth vomit forth her poysen, and in the spring time sucketh up the same againe, which becommeth twice as deadly as former” (3)。Swetnam の女性攻撃については以下のように述べている：“Some dogs barke more upon custome then curstnesse” (4)。この動物との比較は、以下のように批判される Swetnam の「俗悪さ」と連動している：“the Vulgar sort, which have no more learning then you have shewed in your Booke, [...] will applaud you for your paines” (8)。

おそらく Speght が *The Arraignment* を扱うのにもっとも効果的に成功している点は、Swetnam の作者個人としての力量に直接言及している点であろう。Speght が *The Arraignment* のテキストの「作者性」とその出自の扱いの杜撰さに言及しているとみなせる箇所は数箇所あり、例えば以下のような不満を述べる：*The Arraignment* の作者は “like a Taylers Cushion, that is botcht together of shreddes” (31) であると述べたり、“botch up [his] mingle mangle invective against Women” (7) であると言明したりする。批判の主眼は題材の独創性や論理の欠如にあるだけではない。Speght は何度となく *The Arraignment* が “Grammer sense” を示していない “irregularities” に満ちた “disordered” なテキストであるとしている (7)。徹底した批判は *Certaine Quaeres* で行われている。Speght

はまず、*The Arraignment* の愚かしさはあまりにも無数にあるので、各々に応答しようとする事は “as frivolous a worke, as to make a Trappe for a Flea” (31) であろうと言う。それにもかかわらず、非論理性と文法無視についての例示を怠りなくするために、彼女は膨大なリストを挙げて糾弾する：“how reconcile you those dissonant places above cited?” (39)。

Speghtの批判は彼の聖書の扱いにもあてられ、ある時は聖書の別の個所からの引用を通じて Swetnamの女性批判に反論し、また別に、聖書は知的遊び心を実践するために引用される。例えば *The Arraignment* で、男性がサムソンよりも強く、ソロモンよりも賢く、ダビデよりも信心深いという自信がなければ、女性との関わりを避けるべしと警告を発した後に、“for these, and many more have beene overcome by the sweete intisements of women” と続ける個所については、作者はただ単に従来の女性論に見られる論理を反復実践しているだけである (22)。¹² しかし一方でこれに反論しながら Speght は記す：“I may as well say *Barrabas* was a murtherer [...] therefore stay not alone in the companie of a man, trusting to thy owne strength, except thou bee stronger than *Josiah*, and more valiant then *Abner* and *Amasa*, for these and many more have beene murdered by men” (37)。これは、先ほど Swetnam が使用した聖書への言及の仕方をまねてさらに転用し、批判に使いまわした例である。

Swetnamの作者としての力量への批判はそのまま、*The Arraignment* を愚者のたわごとの地位に貶める効果をもつ。論争を作者個人同士の議論として捕らえ直すことによって、Speghtは Swetnamを信仰に薄く文章力にも通じていない「劣った作者」として「発見する」ことになる。女性についての相対する議論は、こうして家父長制イデオロギーの枠組みの中で出会うわけだが、ここでは Swetnamの作者個人の力量不足と一貫性のなさが取り沙汰され、女嫌いの主張は、信仰薄く非論理的な一人の皮肉屋のたわごと「でしかない」として処理されている。

しかし、*Mouzell*を通じて、2番目の「発見」が行われる。Barthesの使用する言葉に倣い、“se découvrir” という再帰動詞として捉えれば、この2番目の意味は「自らを発見する」となる。Speghtが目指しているのは、この2番目の「発見」、すなわち自分自身の「一人の作家個人」としての発見である。ここで Swetnamの「発見」とそれへの抵抗・反論は、この Speght「自身の発見」と連動することになる。それに伴い作者は、自身を攻撃に曝された脆弱な存在としても発見することになる。

Whetstoneの *Heptameron* のようなテキストは、女性が女嫌いの男性と丁丁発止とやりあう様を描いているわけだが、Speghtの応答は、男性の署名付きテキストの内部に包摂された女性の声としてではなく、女性の署名付きのテキストとして露出した形で存在している。よって「作者個人」として Swetnamと同じレベルでもって、上述の家父長制イデオロギーという文化的背景と正面から交渉を重ねることが要求されていく。聖書だけでなく Salter や Vivesらによって奨励された女性教育の枠組み、男性中心文化が女性の表現に加える制限と言う枠組みの中で発話し、かつその枠組みを越えていくという作業が要求されるわけである。Speghtの応答方針は最初の Epistleの冒頭に集約されているといってもいいだろう：Swetnamが Lylyを援用した一方で、Speghtは教父 Lactantiusを引用しながら、*The Arraignment*の “scandals and defamations” に対抗するための足場を示す (1)。女性教育にかかる制限や慎み深い沈黙の美德を説くイデオロギーとの交渉を絶つことなく、むしろその枠組みを承認し、それに一見忠実に協力しているようにみえる作者性を誇示することで自らの発話を可能にする。効果的に反論を進めるために、Speghtの仕事は Swetnamの無信仰をことさらターゲットと定め、教父の仕事や哲学者の仕事、特に聖書への言及によって反論を進めていく。そして過剰な論理性とラテン語の忠実な引用によって、Speghtのテキストは *The Arraignment* がそれによって欠如していると暴露されるはずの論理性や文学性の豊かさを主張していくのである。Speghtは確かに沈黙の美德は体現していないものの、女性に加わる家父長的イデオロギーへのこれみよがしの従順さを演じなおし続ける語り口によって、慎み深さと主張を同時に実現する。例えばテキストは、作者が当時の女性教育観に従順に育ったことを言いたげに “my imperfection both in learning

and age”を繰り返し強調することを忘れないし、「女性」としての作者個人の“insufficiency in literature and tenderness in yeares”を、「慎みをもって」書き添える(5)。こうして彼女のペルソナは、Swetnamとの対照として、その従順な「女性性」の強調によって皮肉にも模範的な作者性として立ち表れることになるし、献詩も彼女の学問に対するプロテスタント的な美德や信仰心、なによりも“her industrious toyle”(10)を賛美することになるのである。

実際、SpeghtはSwetnamへの対抗戦略として、女性に抑圧的なジェンダー・イデオロギーを逆手にとってみせる。特に「男性作家」として特権的な地位を保つSwetnamと比較すると脆弱な立場にあるはずのSpeghtが、その女性作者性を主張することによって逆にSwetnamの男性としての権威を低める効果を表したりもする。例えば*Certaine Quaeres*の中で、Speghtは以下のように説明する：

Although (curteous Reader) I am young in yeares, and more defective in knowledge, that little smattering in Learning which I have obtained, being only the fruit of such vacant houres, as I could spare from affaires befitting my Sex, yet am I not altogether ignorant of that Analogie which ought to be used in a literate Responsarie[.] (31)

ここで女性教育観が言及されているのは、女性であるがゆえに男性が享受する教育の恩恵に授かることができなくても、未熟な男性作者に向かってこれだけの応答が出来るのだということを示すためである。別の個所でSpeghtは、「がみがみ女」の悪癖を体現しているのはSwetnamの“railing Tongue”の方だとも言う(7)。

しかしこの最後の例は、女性の文学活動を制限してきたイデオロギーの幾ばくかをSwetnamの姿を通して再肯定していることにもなってしまう。要するに、作者性をうまくコントロールし、既成の言説を逆手にとって作者性を獲得している一方で、Speghtの声はこうして「制御の効かない女性性」を糾弾するイデオロギーを再び呼び出し補強しているようにも見えるのだ。他にも既成のジェンダー・イデオロギーの枠組みをずらすに至らないままに、テキスト全体を通じてSpeghtのジェンダーが「男性化」する例が横溢している。例えば献詩では、ゴリアテと対決するダビデを挙げながら、“he that for his Countrie doth expose / himselfe unto the furie of his foe”とし、Speghtのジェンダーを「いさましい男性性」の模範として示している(10)。言い換えればこの献詩は、Speghtの主張をただジェンダーの役割を転倒させた理想として提示するに留まっているのである。本論部ではSpeghtはSwetnamに対して、聖書の題材を使いながら望ましい夫の役割を宗教教育として施す。ここには、ジェンダー・イデオロギーの成立条件自体へのラディカルな視点は全くかけていると言えよう。

4. Conclusion

おそらくSpeghtによる*The Arraignment* 読解において最も注目すべき点は、Mouzellが*The Arraignment*のある一部のみを意図的に取り上げて、それをSwetnamという個別の作者性からくる欠点として論駁するという、ある種の戦略的な「誤読」だったということであろう。あるいはSwetnamの韜晦に満ちた冗句をまともに受けて立ったものといえるかもしれない。*The Arraignment*の博した人気からすれば、Speghtが行ったSwetnam批判は、同時代においてはたいした意味を持たなかったかもしれない。しかし彼女の「作者性」を強調する戦略は、「始末に終えない非論理的な女性性」という女嫌いの作り上げた典型に陥ることなくして女性の声を立ち上げた先駆と言える。しかしそれでもSpeghtのテキストは、自身の「作者」の主体を立ち上げることがそのまま、それを既存のイデオロギーに絡め取られるに任せる危険と脆弱さを持っていることを明らかにする。「作者性」というものがあるとすれば、それは文化的コンテクストの中で、他の書き手や読み手との絶え間ない交渉と不安

定なバランスの上で初めて成り立つ—あるいは成り立たなような地盤に足場を置くことによって初めて主張力をもつ、そして主張力を持ったとたんに足元をすくわれるような—ものであることを明らかにしている。*Mortalities Memorandum* という次作の Epistle において、Speght は次のように書くのである：

I know these populous times afford plenty of forward Writers, and critically Readers; My selfe hath made the number of the one too many by one; and having bin toucht with the censures of the other, by occasion of my *mouzeling Melastomus*, I am now, as by a strong motive induced (for my rights sake) to produce and divulge this off-spring of my indeavour, to prove them further futurely who have formerly deprived me of my due, imposing my abortive upon the father of me, but not of it. (45)

作者性のもつ脆弱さを強調することは、それは同時に「女性作者」が読者の共感を獲得するために振舞う際のある種の媚ともなって、Speght はやっとのことで作者として発話するに至るのである。このような Speght 像を描くことで、果たしてわたしたちは Speght を如何に誤読しているだろうか。この作者にやどるはかなさから、読者は何を感じずればいいのかのだろうか。発話しているのは、一体誰か。

注

- ¹ Shakespeare のイメージは、Droeshout Engraving I & II (Folger Shakespeare Library 所蔵)、The Chandos Portrait (National Portrait Gallery 所蔵) を参考にした。
- ² イデオロギーとテキスト編集のあり方、特にキャノンとの関わりについては、Greetham Chap.9 を特に参照。
- ³ 正典、とりわけ「(女の)上に立つ男」の観念を「マスター」した上で初めて成り立つ正典性については、Sedgwick, 50-51 参照。
- ⁴ Harvey はこれらの問いをフーコーから継承したと思われる。フーコーの問い——“What does it matter who is speaking?” (Foucault 187)——は、「作者」が(著作権の問題に見られる通り)社会的、法的な面で重要な働きしており、よって作者のもつ社会的・法的・政治的な機能は無視できない、という視点に基づいている。
- ⁵ 以下、*The Arraignment of Lewde, Idle, Froward and Unconstant Women* (試論を通じて *The Arraignment* と略記する) のテキストからの引用はすべて 1615 年の初版に依拠し、頁数を引用末尾に記す。なお、試論を通じて特にことわりがない限り、引用文中に現れる斜体は作者本人による。
- ⁶ Mexia における同様の記述は、M2- M2' を参照・比較のこと。
- ⁷ 以下、*A Mouzell for Melastomus* (試論を通じて *Mouzell* と略記する) からの引用はすべて B. K. Lewalski 編集の版に依拠し、頁数を引用末尾に記す。
- ⁸ “the domain of writing” については、Ferguson を特に参照。
- ⁹ Juan Luis Vives も同様の立場から、読み書きを女性の道徳教育に関連付けて論じている (55)。
- ¹⁰ Barnabe Rich は、翻って饒舌と性的放縦さを結びつける。娼婦については以下のように語る：“full of words, shee is loude and babbling” (F1^v)。女性の語りとセクシュアリティを結びつけて考える当時のイデオロギーについては、Boose 参照。
- ¹¹ フーコーは作者の生成について、“the privileged moment of individualization in the history of ideas knowledge, literature, philosophy, and the sciences”(174) と述べる。
- ¹² ここでの Swetnam の文章のみ、Speght が *Mouzell* 本文に引用した頁数に拠る。

引用文献

- Aughterson, Kate, ed. *Renaissance Woman: A Sourcebook*. London: Routledge, 1995.
- Barthes, Roland. "The Death of the Author." trans. Stephen Heath. *Lodge*, 167-172.
- Boose, Lynda. "Scolding Brides and Bridling Scolds: Taming the Woman's Unruly Member." *Shakespeare Quarterly*. 42:2 (Summer 1991): 179-213.
- Brathwait, Richard. *The English Gentlewoman*. London, 1631.
- Chedgzoy, Kate. "Introduction." Chedgzoy, Hansen and Trill 1-10.
- , Melanie Hansen and Suzanne Trill, eds. *Voicing Women: Gender and Sexuality in Early Modern Writing*. Keele: Keele University Press, 1996.
- Ferguson, Margaret W. "Renaissance Concepts of the 'Woman Writer'." *Women and Literature in Britain 1500-1700*. ed. Helen Wilcox. Cambridge: Cambridge University Press, 1996. 143-68.
- Foucault, Michel. "What is an Author?" Trans. Joseph V. Harari. *Lodge* 174-187.
- Greetham, D. C. *Theories of the Text*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Harvey, Elizabeth D. *Ventriloquized Voices: Feminist Theory and English Renaissance Text*. London: Routledge, 1992.
- Jones, Ann Rosalind. "Nets and Bridles: Early Modern Conduct Books and Sixteenth-Century Women's Lyrics." *The Ideology of Conduct: Essays on Literature and the History of Sexuality*. Eds. Nancy Armstrong and Leonard Tennenhouse. London: Methuen, 1987. 39-72.
- Lane, John. *Tom Tel-Troths Message, and his pens complaint*. London, 1600.
- Lodge, David, ed. *Modern Criticism and Theory: A Reader*. 2nd ed. London: Longman, 1988; repr. 1996.
- Mexia, Pedro. *The Foreste: or Collection of Historyes*. trans. Thomas Fortescue. London, 1576.
- Moi, Toril. *Sexual / Textual Politics: Feminist Literary Theory*. London: Methuen, 1985; rpt. London: Routledge, 1995.
- Munday, Anthony. *Zelauto: the Fountaine of Fame*. London, 1580.
- Purkiss, Dianne. "Material Girls: The Seventeenth-Century Woman Debate." *Women, Texts and Histories 1575-1760*. Eds. Clare Brant and Dianne Purkiss. London: Routledge, 1992. 69-101.
- Rich, Barnabe. *My Ladies Looking Glass*. London: Thomas Adams, 1616.
- Salter, Thomas. *The Mirrhor of Modestie*. London, [n.d.].
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Epistemology of the Closet*. Harmondsworth: Penguin, 1994.
- Shepherd, Simon, ed. *The Woman's Sharp Revenge: Five Women's Pamphlets from the Renaissance*. London: Fourth Estate, 1985.
- Speght, Rachel. *The Polemics and Poems of Rachel Speght*. ed. Barbara Kiefer Lewalski. Oxford: Oxford University Press, 1996.
- Swetnam, Joseph. *The Arraignment of Lewd, Froward, Idle and Unconstant Women*. London, 1615.
- Tell-Trothes New Yeares Gift Beeing Robin Good-fellowes newes out of those Counties, where inhabites neither Charity nor honesty*. London, 1593.
- Vives, Juan Luis. *De Institutione Foeminae Christianae*. trans. Richard Hyrde. 1529; rpt. *Vives and the Renaissance Education of Women*. Ed. Foster Watson. New York: Longmans, Green and Co., 1912.
- Whetstone, George. *Heptameron of Ciuill Discourses*. London, 1582.
- Woodbridge, Linda. *Women and the English Renaissance: Literature and the Nature of Womankind, 1540-1620*. Urbana: University of Illinois Press, 1984.
- Wright, Stephanie. "The Canonization of Elizabeth Cary." Chedgzoy, Hansen and Trill 55-68.